

おたふくかぜの予防接種をご希望の方に

1 おたふくかぜとその症状

患者のせきやくしゃみなどにより空中に飛び出した、ムンプス(おたふくかぜ)ウイルスを吸い込むことにより感染します。潜伏期間は2~3週間で、軽度の発熱と耳の痛みで始まり、耳の下(耳下腺)のはれが顕著になりますが、その症状は通常5~7日で回復に向かいます。

2 おたふくかぜと合併症

おたふくかぜの合併症としては無菌性髄膜炎、ムンプス難聴、脳炎、睾丸炎(精巣炎)、卵巣炎、膝炎などが報告されています。合併症が起こる頻度は、無菌性髄膜炎(症状としては発熱、頭痛、嘔吐)が約10人に1人、ムンプス難聴が約1,000人に1人、脳炎(症状としては発熱持続、けいれん、意識障害)が5~6,000人に1人と報告されています。思春期頃におたふくかぜにかかった人のうち、数%の人が睾丸炎(症状としては発熱、睾丸腫脹)を合併しますが、男性不妊の原因となることは極めてまれです。

3 免疫

おたふくかぜの感染者は小学校低学年や幼稚園の子供たちに多くみられます。一度おたふくかぜにかかったひとが耳下腺炎を起こす例も再発性耳下腺炎として報告されていますが、ムンプスウイルスの感染によるという確実な証拠はありません。予防接種を受けた人のほとんどに免疫ができます。しかし、抗体の低下する症例が報告されており、ワクチンの有効率は90%前後ではないかと考えられます。小さい頃におたふくかぜにかかった場合、特徴的な症状を示さない、いわゆる不顕性感染で終わる例もあります。既に抗体のある人にワクチン接種を実施しても問題はなく、免疫は高められます。

4 ワクチンの効果と副反応

①おたふくかぜワクチンの効果

おたふくかぜワクチンは弱毒生ワクチンで、身体の中でワクチンウイルスが増え、抗体ができます。抗体はワクチン接種を受けた90%前後の人にでき、おたふくかぜに対する免疫はワクチン接種2週間後からできます。おたふくかぜの潜伏期間にワクチン接種を受けても、特におたふくかぜの症状が重くなるようなことはありません。

②おたふくかぜワクチン接種後の副反応

おたふくかぜワクチン接種後2~3週ごろに、発熱、耳下腺腫れ、嘔吐、咳、鼻汁等の症状があらわれることがあります。これらの症状は通常、数日中に消失します。

接種後3週間後に、発熱、頭痛、嘔吐等の症状が見られる無菌性髄膜炎が数千人に1人程度の頻度、接種後数日から3週間後に紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等症状の見られる血小板減少性紫斑病が100万人に1人程度の頻度で、また、頻度は不明ですが、急性散在性脳脊髄炎や脳炎・脳症があらわれることがあります。まれに難聴、精巣炎があらわれたとの報告があります。

接種後(30分間程度)にショック、アナフィラキシー(蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫等)がまれにあらわれることがあります。

(裏面もご覧ください)

5 次の方は接種を受けないでください

- ①明らかに発熱している方
- ②重い急性疾患にかかっている方
- ③本剤の成分〔カナマイシン、エリスロマイシン(抗生物質)等〕により、アナフィラキシーを起こしたことがある方
- ④医師より免疫不全等の診断を受けた方または免疫抑制をきたす治療を受けている方
- ⑤妊娠している方および妊娠している可能性のある方
- ⑥その他、医師に接種が不適当な状態であるという診断を受けた方

6 接種を受けるときに

他の生ワクチン(BCG・麻しん・風しん・水痘・麻しん風しん混合など)を接種した場合は27日以上あけてから、また不活化ワクチン(DPT-IPV4種混合・DPT3種混合・DT2種混合・不活化ポリオ・日本脳炎・インフルエンザなど)を接種した場合は6日以上あけてから接種を行ってください。

おたふくかぜワクチンの接種は任意接種ですので、ワクチンの効果や副反応をお考えになったうえ、ワクチンの接種を受けるかどうかをお決めください。

本剤の接種により健康被害が発生した場合には「医薬品副作用被害救済制度」により治療費等が受けられる場合があります。詳しくは独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページ等をご覧ください。

ワクチンの接種を受けられるとお決めになった場合には、「おたふくかぜワクチン接種申込書・予診票」に正確に記入し、医師の問診、診察をお受けください。

もし、元気がないなど、ふだんと変わったことがあった場合には、医師にご相談ください。

【女性の方への注意事項】 接種前1ヵ月間、接種後2ヵ月間は、妊娠を避ける必要があります。

接種予定日	年 月 日()	医療機関名	
--------------	----------	--------------	--